

寝太郎之像

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

在 来線側のJR厚狭駅前にある寝太郎の銅像は、思っていたよりも大きかった。台座の高さは、三メートル余りもある。その上に、同じく三メートルの狩衣姿の翁が立ち、左手には杖をつき、右手で稲束を荷っている。これは昭和四十八年に彫刻家の米林勝二氏が製作したもので、ここから北へ一・五キロほど離れた田心寺が所蔵する小さな「寝太郎稲荷」をモデルにした。この寝太郎が堰を築いたというが、地元には伝わる話は次のようになる。

庄屋の息子の太郎は、毎日寝てばかりいてゴロゴロと過ごしていた。そうして三年三月がたったある日のこと、太郎は父親に千石船と船いっぱいのわらじをつくってくれといわれた。なんのことやら庄屋には見当もつかなかったが、可愛い息子のために願いをかなえてやると、太郎は佐渡ヶ島をめざして大海原へと漕ぎ出していった。

島に着くと太郎は、積み荷のわらじを島人たちのボロボロのわらじと交換して、船いっぱいに積んで帰ってきた。あきれれる村人をよそに、太郎は大きな桶のなかで、わらじを一つひとつ丁寧に洗いはじめた。数日後、桶の水をくみ出してみると、なんと底にはまばゆいばかりの砂金がたまっていた。そう、太郎は一握りも持ち出すことが許されなかった佐渡金

山の土を、どうして持ち帰るか三年三月考え続けていたのだ。こうして手に入れた砂金で堰を築き、豊かな美田が拓かれた。

この寝太郎のような怠け者が突然知恵を働かせる昔話は、青森から沖縄まで全国に分布しているが、多くは長者の娘を娶るための狡知譚であり、厚狭の寝太郎とはおもむきが異なる。いったい、どうして水田の開拓者となったのか。

既存の文献には、文禄元（一五九二）年頃の千町ヶ原一帯は、沼沢地で入海のようになっていたと書かれている。降って寛永二（一六二五）年と貞享三（一六八六）年の千町ヶ原を含む検地帳をみると、一・二六町ほど水田が増えていることから、この間に千町ヶ原が拓かれた可能性が示唆される。さらに降って寛保二（一七四二）年の『地下上申』には、「厚狭之瀬太郎と申者吟味にて田地ニ相成候」とあり、字こそ違えども「瀬太郎」が登場する。これが何者かはわからないが、「瀬」と「寝」は音が同じであるため、語り部に伴われて旅してきた寝太郎が、いつしか取って代わったのかもしれない。

文政元（一八一八）年頃の『寄題枕流亭十二勝』において「寝太郎」は初出し、天保十二（一八四二）年の『風土注進案 未益村』には、「寝てばかりの寝

太郎」という物語の原型が記されている。千石船と佐渡ヶ島の味付けは、昭和四年以前には成され、昭和二十八年二月二日の朝日新聞に掲載された「寝太郎物語」によって広く知られることとなった。

こうして「三年寝太郎」は厚狭の昔話となるが、寝太郎の正体や彼がつくった堰がどのようなものだったかは全く不明であり、今は昭和三十八年に完成した新しい寝太郎堰が、千町ヶ原を潤している。（つづく）



寝太郎之像

[交通]JR厚狭駅北側在来線口前

※碑文の全文は日建連HPに掲載しています。